

小さな仕事を大きな成果に。
地元企業とともに歩む喜び。



有限会社 横山鉄工

100



こまめな対応で信頼を重ね、
大きな仕事を獲得。

地元企業の小さな依頼にもこまめに対応する誠実な姿勢を買われ、大規模な製造ライン開発を受注。地元意識が強い土地柄の中、相手企業の成長を支えながら自社も技術力を蓄え、道外や海外にも進出するチャンスをつかみました。



有限会社 横山鉄工

本社 帯広市西17条南1丁目15
TEL 0155-33-3511
主要事業 1955年創業。農機具をはじめ各種機械の製造・修理、工場設備管理などを行っている。バウムクーヘン製造機械や菓子スライサーなど菓子製造機械を手がけ、地元・十勝から関東、東北、台湾など国内外に顧客を有する。

代表取締役 横山 邦彦

誠実な対応で菓子メーカーと信頼関係を築く

十勝の大地と酪農の恵みを生かしたスイーツで全国に知られる菓子メーカー。その代名詞ともいえる人気スイーツの製造ラインを一手に引き受けているのが横山鉄工だ。

菓子メーカーと横山鉄工は先代からのお付き合い。菓子メーカーでは当時、道外の大手メーカーの菓子製造機械を導入していたが、急なトラブルにすぐに対応できない道外メーカーに代わり、横山鉄工がメンテナンスを任せられるようになったという。「困ったときにすぐに飛んでいけるのは地元企業ならではの強み。機械の故障はもちろん『雨漏りがして困る』なんて小さな頼まれ事にもこまめに対応してきました。」と代表取締役の横山邦彦さん。そんな誠実な姿勢が買われ、互いに代替わりしたあとも信頼関係が続いていく。そんなある日、「当社を代表する焼き菓子の製造ラインを作り直したい」という依頼が舞い込んだ。今から10年ほど前のことである。

地元企業が手を携え、ともに成長する喜び

菓子メーカーではその商品のさらなる売上げアップを目指して、多額を投資して道外メーカーの機械を新規導入したばかり。しかし使い勝手などに不満があり、総入れ替えを決定したのだ。とはいえ横山鉄工は社員3名の小さな会社。大手メーカーを超える機械を自分たちに作れるのか—最初は不安だった横山社長だが「当社と横山鉄工、地元の電気設計

会社の3社協同で開発したい」と言われて気持ちが悪くなったという。「当社は電気・コンピュータ系統を扱っていないので、今まではそういう仕事は断っていました。でもそれぞれの専門技術を組み合わせれば、今までできなかった大きな仕事も夢じゃないと実感したんです。」ともに十勝に根を下ろす企業同士が手を組み、膝を突き合わせて話し合い、アイデアを形にしていって。作業効率が向上して生産量も売上げも右肩上がりに推移。味のバリエーションも増えた上、新たに開発した専用スライサーを使った新商品も誕生。最初は2台だった製造機械も現在6台に増設にされた。

それらの商品は「十勝の人気スイーツ」としてマスコミに取り上げられる機会が多くなり、全国にファン層が拡大。製造ラインもテレビCMや工場見学で一般の人の目にもふれる機会が増えてきた。「自分が作った機械がたくさんの人に見てもらえるのはうれしいね。でもそれ以上に、ともに歩んできた菓子メーカーがここまで成長したことが自分のことのようにうれしいし、成長とともに当社に任せてもらえる仕事が増えたのもありがたい。会社の規模なんて関係ない。小さな仕事の積み重ねが大きな仕事を呼ぶんです。」

ひとつの成功は新たなチャンスを引き寄せる。横山鉄工の実績を耳にした東京の焼き菓子製造機械メーカーが「廃業にあたり顧客を引き継いでほしい」と依頼してきたのだ。これによって東北エリアに販路が開かれた上、東京の展示会にも参加できるようになった。さらに台湾の菓子メーカーにも焼き菓子製造

機械が導入されるなど、海外にも販路をひらいている。

十勝人気質と職人魂で、
完成度の高いものづくりを

地方都市の小さな鉄工所が、食の世界で大きな実績を築くことができた理由は何だったのか。「一つ目は地元意識が強い十勝人気質。地元企業同士が協働することで、自社のキャパ以上の仕事に取り組める。二つ目は、当社が特化した得意分野を持っていなかったこと。来る仕事は何でもやってきたから、お菓子という新しい世界もすんなり受け入れられた。」と横山社長。そして三つ目は「安全性と完成度へのこだわり」だ。「異物混入を防ぐため、納品直前まで厳重にチェックします。煩わしいから普通の鉄工所はやりたがらないけど、あえてそれをやることで可能性が広がる。フードバレー構想も本格化しつつある十勝で、食の分野に挑戦しない手はありません。また、ステンレスは食品関連機械に不可欠だが、磨き甘い作業する人が手を切つてケガをする。皮膚の上を横滑りさせても切れないくらい磨きあげ、完成度の高い製品づくりを目指しています。」

「背広を買う時、ボタンが取れかかっていたり、糸がほつれていたりする背広を選ぶか？」というのが先代の口癖だった。先代から受け継いだ職人魂が、今日も小さな作業場に満ち満ちている。